
プレイヤーズ

カラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレイヤーズ

【Nコード】

N9837G

【作者名】

カラー

【あらすじ】

平穩に暮らしていたマリオの元に届いた招待状。それがすべての始まりだった……！さまざまな思惑が絡み合い、一つの物語が形成される！

「プロローグ」

とある世界のとあるところのことです。
夜、街灯が道を照らす時間帯に、とある少女が母親にせがみま
した。

おかーさん、ご本よんでー。

少女は、母親に本を読んでもらうのが大好きでした。
母親も、少女が本を読んであげないと眠れないことを知っている
ので、にっこりと笑って返事をしました。

いいわよ。今日はどのご本がいい？

いつものようにお姫様が幸せになるお話をねだるのかと思いきや、
少女は不思議な本を母親に差し出しました。
どうやら、これを読んで欲しいようです。

……” Dios gemelo ”……？

どうやら、異国の言葉で書かれているようですが、どういつ意味
かは分かりません。しかし、少女が早く早くと言っているので、母親は意
味を考えるのを放棄しました。

とりあえず、少女にベットの中に入るように言って、椅子に座りました。

少女は大人しくベットに入り、期待に満ちた顔で母親を見ています。

それを確認してから、母親は本を読み始めました。

* * *

あるところに、双子のカミサマがいました。

その場所は二人の思うがままになる世界でした。どんなことでもすることが出来、どんなものでも手に入れることが出来ました。

しかし、その世界には双子のカミサマしかいませんでした。

長い間、二人でいろいろなことをして遊んでいましたが、最初は楽しくても、だんだんと飽きてしまいました。

そのうち、二人で出来る遊びはほとんどやり尽くしてしまい、楽しいことがなくなりました。

ある日のことです。

相変わらず退屈な日のことでした。

お兄さんのカミサマが、弟のカミサマに言いました。

弟よ。一つ、面白い遊びを思いついたのだが。

どんなものだ、兄よ。

カミサマたちは面白いことが大好きなので、弟のカミサマはすぐにお兄さんのカミサマに尋ねました。

人形で遊ぶのだ。

お兄さんのカミサマはそう言いましたが、弟のカミサマは不服そうに言い返しました。

兄よ。人形遊びなど、当の昔に飽きたのではないか。

そう、昔もまったく同じ言葉を言って、二人は人形遊びをしました。

しかし、これもまたすぐに飽きて、遊ぶことを放棄したはずで

す。

しかし、お兄さんのカミサマは自信満々に言いました。

安心しろ、今回はちょっと趣向を変えようと思っ

お兄さんのカミサマは言いました。自分の意思で動く人形を作り、自分たちはそれを観察するのだ、と。自分たちが参加するのは偶にだけにする、と。

弟のカミサマは呆れながら言いました。

ならば、我らのすることなぞないではないか。

見守ることも我らのすること。違うか？

お兄さんのカミサマは笑って言いました。
弟のカミサマはため息をついて

……不服だが、それはそれで楽しそうだ。一度やってみるか。

そう言いました。

* * *

そうして、双子のカミサマは……。

母親の言葉は、そこで止まりました。

わくわくしながら聞いていたのに、母親がいきなり読むのをやめたので、不服そうに母親の顔を見ました。

不思議そうに本を眺めていた母親は、少女の視線に気がついて、少女に困ったような笑顔を向けました。

ねえ、このご本、何処で見つけたの？

母親が何故そう聞くのか分かりませんが、少女は素直に答えました。

少女は知りません。母親が言葉を止めた理由。

それは、あれ以上の言葉はにじみすぎて読めなくなっていたからです。

そのことを、少女は知りません。

母親は知りません。少女の持ってきた本のことを。

そのことを、母親は知りません。

少女は素直に答えました。

知らないおねーちゃんにもらったの！！

にっこりと笑って、答えました。

の世界が滅びたことも、誰も知りません。

その夜、こ

「第一話」 始まり

とある林の中。

小鳥たちがさえずり、小川のせせらぎがかすかに聞こえてくるような平和な林。

そんな中を一人スキップしている少女がいた。

普通は森林浴やピクニック程度でしか人が訪れないような場所。少女もあまりここに立ち寄ることはしない。が、今日だけは別だった。

気まぐれの遠回りが、とある人を拾うことになることになるとは。

* * *

「う……」

かすかに聞こえた足音で、男は目が覚めた。

目を少し開け、首だけを使って周囲を見渡し……、ガバリと起き上がった。

「……どっだ、う……」

ベットしかない簡単な部屋。窓から差し込んでくる陽は高くなさそうだ。

「あれ？ 起きたんだ」

そう言いながらひょっこりと顔を出す少女が一人。

出で立ちは、白いワンピースを着て、青い薄手のスカーフを首に巻いている。黄緑色の短髪で、右のみみ上げだけが異様に長く、白い布でまとめて紅い紐でくくっている。髪型（と言うよりも一部の長い髪）を除けば、どこにでもいそうな少女だ。

あまりのタイミングのよさに、男は身構える。

男の態度を見て少女はため息を一つついた。

「……あなたさあ、誰だか知らないけど、それが恩人にとる態度？」

その言葉に男は眉をひそめる。

「恩人……って、どういう事だ？」

が、少女はその言葉を無視して言い放つ。

「名前」

「……はあ？」

物分りの悪い男に、少女はまた一つため息をついた。

「だーかーらー。名前を覚えてくれない？ そしたら教えてあげる」

その言葉を聞いて納得したらしい。男はああ、そういう事と思いながら少女の質問に答えた。

「俺はマリオ。マリオ・グランカートだ。……で、君は？」

「え、わたし？ クレアよ。クレア・スイニストラ」

「しに……？」

「スイニストラ！ クレアでいいよ……」

ファミリーネームを男　マリオが言えなかったことに少女
クレアはため息をまたついた。

それを見て、心配そうにマリオが言った。

「そんなにため息ばっかついてると、幸せが逃げるぞ？」

「……誰のせいよ……」

ま、そんなことはどーでもいいけどね、と呟いてからクレアはマリオに尋ねる。

「とりあえず、なんか食べる？」

「そ、そんなことよりも、さっきの……」

マリオがそう尋ねている途中に。

グウウウウウ

「……体のほうは、正直みただね」

「……ほっとけ！」

*
*
*

「……ふはあ！ 美味しかったー。ごちそうさん！」

「お粗末様。……ずいぶんと好い食いつぶりね」

その後、マリオは小さなリビングに連れられて、質素な朝ごはんを振舞ってもらった。

クレア曰く、昨日一日中ずっと倒れていたらしい。通りで腹が減っているわけだ。

食器を洗っているクレアに、思いついたことを聞いてみた。

「なー、クレア。お前、家族はー？」

「……お兄ちゃんが……一人。たまーに帰ってくる程度だけど」

心なしが答えるときの歯切れが悪かったような気がするが……。
気のせいだと思い直し、気にすることなくマリオは続ける。

「俺にも弟がいんだよなー……」。

って、何処だっ、ルイージ……！！」

ガッシャーンと何かが落ちる音がした。ついで、マリオの元に届くのは怒声。

「いきなり叫ぶなあ!!!!!!」

「す、すまん！」

反射的に謝った。何故かは分からないが。

「たつく……。周りに民家がないからいいけど……。びっくりさせないでよー！」

クレアはマリオを見ながらぶつぶつと言った。どうやら皿洗いは終えたらしい。

「ほ、本当にごめん」

「たつく……。……。で？」

またいきなり話題を変えた。どうやら彼女の性格らしい。戸惑いながらもマリオは聞き返す。クレアはため息をついた。

「少しは察しようとしたら……。？」

「努力は……。する」

「そう。……それで、弟さんがどうしたの？」

クレアが呆れながら尋ねなおすと、マリオは血相を変えた。

「そ、そうだった。」

なあ、クレア。俺にそっくりな男は近くにいなかったか？
全体的に緑な奴なんだが……」

「ちょ、ちよっと、落ち着いてよ!」

クレアに言われて、マリオは我に返った。クレアはいきなりまくし立てられて少し驚いているようだ。

その様を見て、マリオの口からは謝罪の言葉が出てきた。

「……すまん」

「んー。いいよ」

案外あっさりとクレアは許してくれた。

彼女は少し笑いながら、どこことなく寂しそうに言った。

「いいなあ、弟さん。お兄さんにこんなに心配してもらえて……」

「あ……………」

その言葉を聞いて、マリオはクレアの言葉を思い出した。

『……………お兄ちゃんが……………一人。たまーに帰ってくる程度だけど』

そう言ったとき、歯切れが悪かったそんな気がしたが……………。それは言いたくなかったから？

となれば、マリオは彼女の古傷を傷つけたということに……………。

「……………本当に、すまん」

少しして、彼女は口を開いた。

「……………お兄ちゃんのごことは気にしなくて良いよ。今も元気づて事は分かってるし……………」

見透かされている事には驚かなかった。なんとなく、彼女なら出来そうな気がしたからだ。

クレアは言った。

「……残念だけど、弟さんは見てないよ。あなた一人しか、いなかった」

何度か口を開いたり閉じたりしていたのは、彼女の優しさゆえだろう。そうか……とマリオは呟いた。

「……とここでさあ」

長く続いた沈黙を破るように、クレアは尋ねた。

「一体何があったの？ 詳しく教えて」

「……いいよ。いろいろ世話になっているしな」

そしてマリオは語りだした。

太陽が真上に来るまで、まだまだ時間はありそうだ。

* * *

昨日……いや、もう一昨日か？

久しぶりに弟と二人で出かけたんだが……。

……ああ、そうだ。出かけた先で知り合いの郵便配達人とあって……、手紙をもらったんだ。

速達らしくって、家にいなかったからいろんな場所を探してくれ
たらしい。いい奴だよ、あいつは。

と、話がずれたな。

ともかく、手紙を受け取って……とりあえず、読んでみたんだ。

そしたら

* * *

そこでマリオの語りが途切れた。

「それで？ どうなったの？」

クレアが尋ねると、マリオはうなりだした。そして、申し訳なさそうに呟いた。

「……覚えてない」

「そう……」

あ、でもと話をつなげるためか、早口で彼は言った。

「なんか手紙には、『スマッシュなんてら』って書いてあった……はず！」

それと、読み終えたときに周りが光ったりしてた……はず……」

うーん、記憶が曖昧になって……と、不思議そうにマリオは呟いた。

クレアはマリオの言葉を聞いてなんだが考え込んでる。考えがまとまったのか、ポツリと呟いた。

「……もしかしてさあ……、ワープ、させられたんじゃないの……？」

「わーぷ……？ そういえば、ワープの現象に似てたな……。もしかしたらそうかも……！！」

すると、クレアはなにやら一人で納得している。それを見て、マリオはムツとした顔になった。

「な〜に一人で納得してんだよ」

「……いや、だから人が落ちてたのかと……」

そこまで言っただけでクレアは思い出した。

「そういえば、わたしが『恩人』って話、してなかったね」

「？ ……言われてみれば、そうだな」

クレアのいきなりの話題変換は慣れてきたので、特に何も言わずにうなづく。

「あなたね……、道端で倒れてたの」

「そ、そうだったのか？」

「めったと人の通らない場所だったから、不審に思ってたの。……なるほど、ワープで飛ばされたのか……」

「……なあ、クレア」

その話を聞いて引っかけたことがあった。

「何？」

「しょうもないことだが……」

「どうやって運んだんだ？」

「……聞きたい？」

意地の悪そうな笑みを浮かべて、クレアは聞き返した。

「イヤ、エンリョシテオキマス……」

その顔を見て、一つだけ確信した。

俺、すごい方法で運ばれたんだろうな……。

それだけは、確かだろう。

「そっだそっだ。あなたに返すものがあつたんだ」

いきなりクレアは、パンと手を合わせた。

「……返すものって？」

マリオが尋ねると、ちょっと待っててと言ってクレアは席を立った。

戻ってきた彼女の手には赤い帽子と……白い紙だ。

「あ、俺の帽子！」

「ちょっと汚れてたから、洗つといたよ」

昨日は天気良かったし、すっかり乾いてると笑いながら、帽子をマリオに差し出した。

「サンキュ。……んで、その紙は……？」

「あれ？ マリオのじゃないの？」

とりあえず渡しとくねと言って、紙もマリオに渡した。

「見ちゃ悪いかなーって思って、中身は見てないからね」

「……とりあえず、見てみるか」

決心して、マリオは紙を開いた。

そこに書かれていたのは

「地図……？」

「そうみたい……」

いつの間にも後ろに回っていたのか、クレアも地図を覗き込んでい
る。マリオには見たことのない地図だった。

「えっと……この矢印が現在地かな？」

地図の上には矢印が浮かんでいる。どうやら魔法か何かで出来ているようだ。

クレアがそう言うのなら、矢印は現在地を表しているのだろう。

と、もう一つ気になるのはこの……

「赤い旗は……何だろうね……」

クレアにも分からないらしい。

矢印よりもそんなに遠くない位置に赤い旗が立っている。これも魔法で出来ているのか、指で触ろうとしてもすり抜ける。

二人はじーっとそれを見ていたが。

「……目的地……」

ポツリと、マリオはいきなり呟いた。

「目的地……ねえ……。……うーん、ありえなくはなさそうだけど

……」

「……よし、決めた！」

少し考えて、マリオは宣言した。

「俺、ここに行く!!」

「……ちょ、何考えてるのよ!」

さすがのクレアでさえ、その宣言にはこけそうになった。思い直させようと思って、クレアはまくし立てる。

「あーのーねー、そこ行くためには結構な距離歩くのよ?

それにね、この森、お化けが出るとかって有名なんだから! 地元の人も滅多と寄らないような場所よ?

そんなところにあるなんて……絶対怪しい!!
それに、それに……

……なに、その顔」

ふと気がついた。マリオが笑顔を浮かべていることに。何が可笑しいのか、声を殺して笑っている。

じと目でクレアがマリオを見ていると、彼は言った。

「いやー、クレアは優しいなーって……」

あるうことに、そんな言葉を。

「な、な、な……」

褒められ慣れていないのか、今まで勢いの良かったはずの口がまったく動かなくなった。

照れのせいで顔が熱い。

それを見て、マリオは隠すことなく笑った。

「アハハハハハ！」

「わ、笑うなー！ 笑うんじゃねー！！！」

さらに顔を真っ赤にして、クレアはポコポコとマリオを殴る。

ひとしきり大きく笑った後、マリオはクレアに安心させるように言った。

「まあまあ、俺、これでも冒険にも慣れてるし、幽霊も怖くない。冒険だと思えば大丈夫だって！」

それに、クレアに世話になりっぱなしも駄目だし、手がかりはこれしかない。

動かなきゃ何にも変わんないしな」

そう言うマリオの目は、なんだか楽しそうだ。

ため息を一つついて、クレアは言った。

「……わかった。ちょっと待ってて」

少しばかり、呆れと諦めが声ににじんでいた。

* * *

「ほい」

クレアはその手に大きな袋を持って、戻ってきた。
どん、とそれを机の上に置く。

「この紙袋に入ってるのが保存食。味には期待しないでね。

これに入ってるのは食料。あの距離だと腐らないとは思っけど…

…。

これは寝袋。夜は寒いからね。これにでも入って寝て。

懐中電灯は、森に入るときにでも使つて。あそこ暗かったはずだし。

一応、調理器具。見た目に反して軽いから、これ持ってって。

……大体こんなもんかな？」

クレアは説明しながら、中に入っているものを取り出ししていく。
なかなかの手際の良さだ。

マリオは啞然としながら、その様子を見守った。

「……とりあえず……。これ、あげる」

中身を入れなおしてから、マリオに袋を差し出した。

そこでマリオは我に返る。

「ちょ、ちょっと……これは……」

あまつさえ看病してもらって、ご飯を食べさせてもらった身だ。
その上にこんなに物をもらっなんて……。
断ろうと思いついて、口を開こうとして。

「異論は認めない」

ばっさりと切られた。

だが、いくらなんでも見知らぬ男にこんなに物を上げるなんて、常識にもほどがある。そのことを諭そうとして。

「非常識？ 馬っ鹿じゃないの？」

まだ何も言っていないのに、またもやばっさりと切られた。取り付く島なぞ、何処にもない。

またため息をついて、彼女は諭すように言った。

「……あのねえ。これはわたしのお節介よ？ それを受け取らないなんて、最低ね」

「……最低……！？」

「ええ。乙女の好意を踏みにじるなんて……」

「……」

さすがにそこまで言われると、返す言葉もない。少女は続ける。

「それに、今引き止めても、どーせ行くんでしょ？
それだったら送り出す方がいいでしょーが。」

もしも、受け取らないって言うんだったら、ここに留まっただけで、行くんだしたら、受け取りなさい」

そう言っただけで彼女は頑として譲らない。目がそれを物語っている。初めてマリオがため息をついた。

両手を挙げながら言った。

「わーっ。降参！ ありがたく頂くよ」

「よろしい。ありがたく受け取りなさい」

「はいはい」

そう口にしながらい袋を受け取る。量に反して重くはない。それで？とクレアは尋ねる。

「いつ出るの？」

「今すぐにも」

どこのサンタクロースのように袋を背負いながら、マリオは即答した。

お世話になりました。そう言っただけで頭を下げ、マリオは出て行くところ。

「ちよーっと待った」

止められた。

「な、何すんだよ！！！」

せっかく格好良く去ろうとしてなのに……なんて変なことを呟いているが、それを華麗にスルーしながらクレアは言った。

「せめてお昼食べていきなさい」

「何で!?!」

マリオがそう言つと、クレアは返事をした。

腹の音で。

「……お昼だからよ」

「……そう、か……」

太陽は憎らしくも、空高くで輝いている。

は、
戦は出来ません。

腹が減って

「第一話」 始まり（後書き）

はじめまして、カラーと申します。

まだまだ初心者なので稚拙な小説ですが、どうぞよろしくお願いします！

「第二話」 招待

「何故だ。何故奴は来ない……！」

どこか分からない不思議な空間でそんなことを呟く男がいた。声には焦りが滲んでいる。

そんな彼の耳に小さなブザー音が届いた。

ちっと一つ舌打ちをして、彼はその空間から 消えた。

* * *

「着いたー！ ……のか？」

鬱陶しいぐらいに長い森を抜けることが出来た。

どさりと、大きな袋を下ろしながら、男は呟く。

出るときには白かった空も、すでにオレンジに染まっている。

たどり着いた場所は 。

「……どうみても、唯の空き地……にしか見えないけどなあ……」

おっかしいなーと呟きながら、男 マリオは手に握った地図
を見る。

何回見直しても、どうやらここが目的地のようだが。

あの後。

クレアに別れを告げたマリオは、地図と地元の人々を頼りにここ
までやってきたわけだが……。

「手がかりは……無さそうだなあ……」

とほほ……と落ち込みながら、マリオは一歩足を前に出し、

後ろへ大きく跳躍した。

「?????」

着地を見事に決めてから、己の不可解な行動に首を傾げるマリオ。

「……どうやら、無意識でやったみたいですねえ」

マリオの背後から、声が聞こえた。

マリオにとっては、聞き覚えのある声。

「!?!? その声は……」

「無意識であの結界に気づくなんて、あいかわらず凄い勘してますねえ、マリオさん」

後ろにいるのは、マリオの想像通り。

「ヨッシー、だな?」

「お久しぶりですう、マリオさん。五百十八万七千六百九秒ぶりですかねえ」

マリオたちと同じ家に住んでいたこともある弟分であり、マリオの相棒とも言える恐竜　ヨッシーだった。

嬉しそうに、マリオはヨッシーに笑いかけた。

「久しぶりだな、本当に！」

「まったくですう。ルイーダさんはお元気ですかあ？」

そう言われて、なんて答えるか一瞬だけ迷うが。

「あーっと……。あいつも元気だよ！」

嘘をつくことに決めた。

「……そうですか」

短い返答が答えだった。すぐに見破られてしまったようだ。

「と、ところで！ お前は何でここにいるんだ？」

悪あがきのように、とりあえず話題をそらす。多分、ヨッシーはそれさえも気がついていいるだろうが。

「……なんでって……、スマッシュブラザーズのメンバーだから……
……なんですがあ……！！」

突然ヨッシーは黙りだす。ぶつぶつと小声で何かを呟いているようだ。

「よ、ヨッシー？」

マリオが恐る恐る話しかけてみるが、反応はない。

「こづなったらもう駄目だ。考えがまとまるまで、絶対に反応は返ってこない。」

とはいえ、マリオも結構慣れているので、とりあえず待つことにする。

「……………だったら。マリオさん」

「どうした？」

考えがまとまったらしく、ヨッシーはマリオに問いかける。

「『スマッシュブラザーズ』という言葉に、聞き覚えはあ？」

「えー……………。ある、ような、ないような……………」

「『ない』ってことですかあ？」

疑問系で聞いてはいるが、あくまでこれは確認だ。

「が、マリオは頷かなかった。悩みに悩んで出した答えは違っていた。」

「……………いや、訂正。『ある』と思う……………。何処でかは忘れたけど」

「ありますかあ。……………なおさら可笑しいですねえ……………」

「ぼそりと、ヨッシーは何かを呟いた。マリオには聞こえなかったが。」

「……………なんでこんなこと尋ねるんだ？」

耐え切れずに、マリオは尋ねた。ヨッシーはすぐに笑顔で答える。

「面白そうだからですよ」

「そ、それだけ!?!?」

あまりにも自分勝手な理由だったため、マリオは素っ頓狂な声を上げた。

まあ、それだけではないんですがあと呟きながら、ヨッシーはマリオに提案する。

「とりあえず、立ち話もなんですから、中に入りませんか?」

「……何言ってるんだ」

呆れた声をマリオが出した。

それもそのはず、何も無いはずの空き地を指差しながら、ヨッシーは朗らかに言ったからだ。

「が、ヨッシーはマリオの手をがとつかみ、相変わらずの笑顔で言った。」

「まあまあ、すぐに分かりますよ」

手を振りほごうとマリオは上下に大きく振ったが、ヨッシーにうまく掴まれているらしく、まったく振りほごうが出来なかった。

「……何しようとしてるんですかあ……」

「……いや、だってお前、何か変なことを考えてるだろ……?」

呆れたように尋ねるヨッシーに、恐る恐るマリオは言った。
少しばかり涙声なのは、気のせいだろうか……?

「マリオさん。……仕舞いにゃボクも切れますよ……?」

相変わらずの笑顔でヨッシーはマリオに言った。

笑顔ではあるが……、最後の台詞が脅しなのは確実だろう。

「ご、ごめんとマリオがあわてて言うつと、悪意のなくなった声でヨッシーは行きましようかぁと言った。

ヨッシーに引っ張られて一歩一歩と足を進めると、ある一点を超えたとき、背中がぞくりとした。

足を止めそうになったが、ヨッシーがかまわず前に前にと進むので、それは叶わなかった。

そしてヨッシーは扉に手をかけ、勢いよく押し開けた。

「え、とび……！？ え、すげー！！！」

マリオの目に飛び込んできたのは、大きな家。
いや、家というには大きすぎる。どこの金持ちの館かと思いな
がらも感動してしまった。

何に？

そりゃあ、何もなかったはずの空き地に、こんなものが隠されて
いたことに、だ！

「……あそこには簡単な結界が張ってありましてえ……、外から見
たらただの空き地ですが、中に入ったらこんなに大きな館があるっ

て寸法なんですよ」

狙っているのかは分からないが、ちょうどいいタイミングでヨッシーからの説明が入った。

あんな空き地があったら、誰だって怪しく思わないか？という素朴な質問に対しては。

「二重になっていましてねえ。普通の人には、ここも普通の森に見えるんですよ」

まるでわが家のごとくずかずかと歩きながら、ヨッシーはそう答えた。

「？ 俺にはただの空き地にしか見えなかったぞ？」

「で、しょうねえ。まあ、そのことに関しては追々説明しますよ」

すべてを知っているかのような顔でヨッシーは言った。

マリオにとってはすこしばかり面白くないが、そのことを言えばヨッシーがからかってくるのは目に見えている。とりあえず、何も言わなかった。

「というか、一つ聞いていいですかあ？」

「なんだ？」

ちらりと少しだけマリオを見てから、ヨッシーは尋ねた。

「その手の袋、なんなんですかあ？ 結構な量、入ってそうですけど……」

「ああ、これか？　ちよつと知り合いに貰った」

「貰ったあ？」

珍しく、ヨッシーが素つ頓狂な声を上げた。年に二、三回しかないような珍事である。

半ば押し付けに近かったけどなーとマリオは呟く。

ヨッシーはいったん思考を纏めようとして。

「よっちやーん！！！！」

「ぶぐー！！」

横から、ピンクの丸いのに体当たりされた！

マリオは目をぱちぱちとさせている。結構奇妙な風景だったからだ。

「カ、カービィ……」

結構な勢いで体当たりされたので横腹(?)を両手で押さえながら、恨みがましい目でピンク球　カービィを見た。

カービィは嬉しそうな顔で、ヨッシーにお帰りなさい！と言った。

ヨッシーの視線に込められているものには、まったく気がついていないようだ。

「ヨッシー、」

誰だそいつ。マリオはそう尋ねようとしたが、それは叶わなかった。

「困りますよ、ヨッシー。部外者を連れてくるなんて……」

聞いたことのない声が、カービィの飛んで来たほうから聞こえたからだ。

ぱつとマリオがそのほうを見ると、呆れた顔をした青年がやって来ていた。

白いワイシャツとジーンズという格好で、特徴的なのが女かと思うぐらいの長い紫色の髪。ざつと見たところ腰まではありそうだ。糸目らしく、眼の色はわからない。

「部外者じゃないと思いますけど……」

恨みがましい目を青年のほうにも向けながら、ヨッシーはぼやく。相当痛かったようだ。

青年はマリオのほうをちらりと見て、驚いた顔になった。

「もしかして……、マリオ・グランカート……?」

「へ? あ、ああ、そうだが……」

見たところ初対面のはずだが、相手は自分のことを知っているら

しい。そのことをマリオが訝しく思っていると、青年はマリオのほうに凄い勢いでやって来て、言った。

「一体何処に行ってたんですか!？」

どちらかと言つと、叱られた。

「えっとー……」

「まったく、手紙を送ったはずなのに全然来ないもんだから、心配してたんですよ!？」

「ちょ、ちょっと……」

どうして見たことのない人にこんなに言われているのかと困惑している、ヨッシーが助け舟を出してくれた。

「マルテスさん。マリオさんもいきなり言われて混乱していますよ」

「え! っと……、本当ですか? ごめんなさい!」

「え? まあ、いいけども……」

いきなり謝られたりして、いまだに現状に追いつくことが出来ないマリオ。

ため息を一つついて、ヨッシーは言った。

「とりあえず、落ち着きませんかあ、マルテスさん。はい、深呼吸
うー」

言われて、素直に青年　マルテスは大きく息を吸ったり吐いたりする。マリオはぼかんとその光景を見ていた。

と、ちよいちよいとマリオのオーバーオール裾を引っ張る存在が一つ。

足元を見ると、ヨッシーに見事な体当たりをかましたピンクの丸いのがいた。確かカービイと呼ばれていたか。

とりあえず、自分の目の高さぐらいまで持ち上げた。そのほうが話しやすいかと考えたからだ。

「えっと、カービイだったけ？」

「うん、そうだよ！」

嬉しそうにカービイは笑った。

ぷにぷにしてるなーと考えながら、カービイに自己紹介する。

「俺、マリオって言うんだ。よろしくな！」

「まリオ……？」

「そう、マリオだ」

「えへへ……。マリオ、よろしくねー！」

二人の間に和やかな空気が流れた。

……端から見ると、いささか奇妙ではあったが。

「……ほらあ、マルテスさん。落ち着きましたかあ？」

「まあ、なんとか……」

二人が和やかにしているうちに、マルテスもずいぶんと落ち着いたらしい。ヨッシーは頃合を見計らってマルテスに提案する。

「とりあえず、食堂にでも行つて話すのが一番かと思いますがあ…

…」

「それもそうですね」

が、その前にやること……と言って、マルテスはマリオに尋ねる。

「マリオさんに自己紹介していませんか？」

「ああ、まだあなたの名前、聞いてないよな？」

両方の言葉の意味は同じ。分かっているからこそ、マルテスはふつと笑った。

「私はマルテス・デストラと申します。マルテスとお呼び下さいませ。」

この館の 所謂管理人をさせて頂いております。どうぞ、よろしくお願いいたしますね」

優雅な礼をしながら、マルテスは言った。

「俺はマリオ・グランカート……って言っても、あんたは知ってるみたいだけどな」

「……その件については、食堂でお話しましょう」

立ち話もなんですからねと笑って言った。なるほど、物腰の柔らかい、いい人みたいだとマリオは思った。食堂と聞いて、カービィはヨツシーに尋ねた。

「ねえ、晩ごはんはいつ？」

「晩御飯は……後もうちょっとだと思えますよう」

マリオさんも一緒にどうですかあとはヨツシーの提案。願ってもないことなので、マリオは頷いた。

「ああ、お願いしたいとこだが……」

いいのか？と視線で尋ねる。ヨツシーは大丈夫でしょうと言う、なんとも曖昧な返事をした。

さて、と呟いてからヨツシーはしゃがんで、カービィに言った。

「カービィ、ちょっとお使いを頼みたいんですがあ……」

「おつかい！ いいよー！」

「そうですか、じゃあリンクに『一人分追加』って言いに行ってくださいませんかあ？」

「……それだけでいいの？」

ヨッシーの言葉に不思議そうに首を傾げるカービィ。

……しかし、何処から首で何処から体なのか分からないので、端から見たら身体全体を傾けてるように見える。

安心させるように、ヨッシーは笑顔で大丈夫ですよと言った。少しの間だけカービィは思案したが、すぐに笑って言った。

「うん、わかった！ じゃあ、行ってくるね！」

「いってらっしゃい。」

……あ、帰る前に手を洗ってくるといいですよ！ 帰ってきたら一緒に待ちましようねえ！！」

嬉しそうに走っていくカービィに叫び終えてから、くるりとマリオたちのほうに向き直った。

「……マリオさん？」

どことなくマリオが嬉しそうなのが。

むっとしながらマリオを見ると、彼は語りだした。

「いやー、お前が『お兄さん』してるから

成長したなーと思って。

そう言おうとしたとたん、マリオの身体は宙に浮いていた。

一瞬何が起こったのか理解できなかった。

反転している視界に、腕を振り下ろした格好でいるヨッシーが写った。

ちょっとヨッシー？ 照れ隠しにもほどがあると思っただが。

後日、マリオはそう語ったとか……。

とりあえず、マリオの視界はブラックアウトした。

あなたに届

くは、地獄への招待状。

「第二話」 招待（後書き）

人物紹介。

マリオ・グランカート

おそらく、この話の主人公なのかもしれない人物。結構有名人。様々なものに巻き込まれやすい体質。ある意味彼の宿命かもしれない。

楽天的に物を考えていたりするので、呆れられたりすることも多々ある。決める時は決める、とは本人の言。

ヨッシー

マリオの相棒兼弟分。ルイージにべったりなのは自覚している。

頭は大変良いと評判。案外黒かったりする。研究者である、と本人は主張している。

本当は心を読めるのではないのか、とよく言われている。そんなことは無い、多分。

カービィ

可愛い。ププランドの星の戦士。見た目に似合わず大変強い。

よくヨッシーと大食い競争をしている。大概はカービィが勝っている、らしい。あと可愛い。

マルテス・デストラ

館の管理人。物腰柔らかな、長い紫髪的青年。

笑顔の下にはいろいろと隠しているものがあるらしい。

「第三話」 下準備

「まったく……、いきなり何を言い出すかと思えば……」

パンパンと手を叩きながらヨッシーは言った。
気のせいだろうか？ 顔が赤い。
のほほんとマルテスは言う。

「投げ飛ばすなんて、凄い腕力してますね」

そう思つのも仕方ない。男一人＋ を片手で投げ飛ばしたのだ。
が、ヨッシーはきよとんとしながら言った。

「腕力？ ほとんど使ってませんよう？」

曰く、投げ飛ばすのにはコツがあつて、それさえ分かっているれば
これぐらい楽勝らしい。

その説明を聞いてマルテスは啞然としている。

「……とはいっても、実際にやったのはそんなに多くないですけど
ねえ」

そこら辺は腕の見せ所なのだから。どうでもいいが。

「それで……。マリオさんはどうします?」

我に返ったマルテスはヨッシーに尋ねる。もちろん、自分の中では決まっているが。

「……食堂に連れて行きましょう。目が覚めたときに説明することがあるでしょう?」

「ええ。その通りです」

「そして、これで十人……。やっとあなたの『主様』に会えるわけですねえ……?」

「……ええ。そう宣言しましたから」

宣言。それは、ヨッシーをここに留めるために言った台詞。

『メンバーが十人そろったとき、私の主様に会わせる』

駄目もとで言った台詞だが、何故かヨッシーはその言葉を聞いて、ここに留まると言い出したのだ。

「ひとつ尋ねていいですか？」

マルテスにとって、ずっと気になっていたことがある。それは

「何故、私の宣言を聞いた後に、留まると言い出したんですか？」

するとヨッシーは、くるりとマルテスのほうを向き、一つ指を立てながら言った。

「一つ。私を強制的にワープさせるような理由が気になった」

そう言いながら、ヨッシーはもう一つ指を立てる。

「二つ。私以外にも同じ目にあっただと言う人がいると。その人たちの存在が気になった」

また一つ、ヨッシーは指を立てる。

「三つ。勝手に呼び出しておいて、まったく顔を出さない『主様』

の顔を見てみたい」

さらに一つ指を立てる。

「そして、四つ目

あなたの異様な焦りが気になった」

「!?!?!」

今まで黙っていたマルテスが息を呑んだ。その様は誰がどう見ても、明らかに動揺している。

「……やはり動揺しましたねえ。思ったとおりですう」

にこにこ笑いながらヨッシーは言った。

マルテスはただ困惑した。ヨッシーの笑顔に悪意がないのだ。

「ど、ういふこと、です?」

無理やり声を出したから変に言葉が途切れている。そのことを自覚しながら、何とかマルテスは言った。

「……ごめんなさい。鎌かけて見たんです。……まさか、ここま
で効果があるとは思ってませんでしたがあ……」

ヨッシーは困ったように笑った。

「とりあえず、食堂に行きませんか？」

その提案に、マルテスは黙ってうなずいた。

* * *

その後。マルテスがマリオを、ヨッシーが袋を持って食堂にやっ
て来た。

マルテスはとりあえず、マリオをテレビの前のソファーに寝かせ
てる。

ヨッシーはそんなマルテスを見ながら、やりすぎたかも……とひ
しひしと感じていた。

本当に、少し鎌をかけてみただけなのだ。
が、それだけでいつもはお喋りなマルテスが黙ってしまうなんて
……。

はあ、と一つため息をつく。できることなら、少し前の自分を殴りに行きたい。意味がないことは分かっているが。

まあ、これで一つやることが出来た。マリオをなんとしてもここに留まらせねばならない。

それは今までの皆の性格、行動、そして勘によって導き出された答えだ。

……あとは、マルテスに対する、少しばかりのお詫び。

それを実現させるには……一芝居打つのがいいだろう。

そう考えて、ヨッシーはマルテスを呼んだ。

「マルテスさん」

「……なんでしょうか」

先ほどより落ち着いているらしいが、未だに雰囲気が硬い。何であんなことしたのだろうと、過去の自分を恨みながら、ヨッシーはマルテスに言った。

「少しお願いがあるんですが」

* * *

「ヨッシー、ただいま！」

そう言いながらカービィが食堂にやって来た。頭の上に実に美味しそうな料理を乗せて。

とてととと歩くカービィを微笑ましく見守りながら、ヨッシーは気になることがあるので言った。

「おかえりなさい、カービィ。……つまみ食いはしてませんよねえ？」

「むー、してないよ！ー！」

「本当ですかあ？」

「ホントだもん！ー！ー！」

そう言ってカービィはむくれてしまった。どつちら本当のことらしい。

小さく笑いながら、ヨッシーは謝る。

「くくく……。ごめんなさい、カービィ」

「あー！ いま笑った！ー！」

そう言ってますます機嫌が悪くなるカービィ。

そこに少年が呆れながらやって来た。

「もー、ヨッシー！ カー君をからかいすぎだよ……」

赤い帽子に青紫と黄色のボータの服を着ている少年
彼の周りにふたつ、料理の載った皿が浮かんでいる。
PSIちからでも使っているのだろう。

はあ、とため息をつきながら彼はぼやく。

「まったく、リン兄も人使いが荒いよ……」

「……ご苦労様ですう」

「そう思っただったら手伝ってよ……」

ぶつぶつと呟きながら、ネスは机の上に料理を置く。器用なものだ。

カービィも頑張って料理を置こうと背伸びしているが……、料理を落とされたら堪らないので、ヨッシーが代わりに置いてあげた。

と、ネスがマリオに気づいた。

「あれ……。ヨッシー、この人がマリオ？」

「ええ、そうですよう」

ふーんとネスは言った。大して興味はないらしい。
マリオの名前を知っていたのは、カービィに聞いたからだろう。
この二人は仲がいいから。
ふむ、と一つ考えてから言った。

「ネス、テレパシーはしなくていいのですかあ？」

「テレパシー？ …… あ！ 忘れてた！」

ありがとと短く言って、ネスは集中しようとする。が、その前に
ヨッシーは言った。

「一緒に伝えて置いてください。『新しいメンバーが入るかもしれ
ません』と」

「りょーかい」

そう言って、今度こそネスは集中する。
気がつけば、カービィが詰まらなそうな顔になっている。そして、
何か思いついたらしくマリオに近づいて

「…………やめなさい、カービィ」

ひょいと、ヨッシーはカービィを持ち上げる。カービィの考えに気がついたからだ。

「はーなーしーてー」

じたばたとカービィは暴れるが、ヨッシーはまったく離す気はないらしい。

カービィを目の前まで持ち上げて、諭すように言った。

「カービィ、寝ている人のひげを引っ張ろつとしない！ ……分かりましたかあ？」

「むー」

またカービィはむくれた。納得していないらしい。はあとため息を一つついて、ヨッシーは言った。

「……もうすぐ御飯なんですから、ちょっとした間だけでいいので、我慢してください。

そのうち皆来ると思っていますしい……」

「……ほんとに？」

そう尋ねるカービィの目は、ヨッシーの言葉を信用するかどうか

迷っているのが分かる。

信用されていないなーと思いつながら、本当ですう、と頷く。

と、そこに本当に人がやって来た。金髪碧眼の青年だ。

「あれ？ 何やってるんですか、ヨッシー」

手には今日のメインの料理。相変わらず美味しそうだ。

「……特に何もしてませんよう？」

嘘であって嘘ではない。が、今見ただけならずいぶん奇妙な光景だろう。

ヨッシーがカービィで遊んでいるようにしか見えないのではないか？ 本人たちは気にもしてないが。

ことりと、丁寧に料理を置く青年 リンク。と、彼はあるものに気がついた。

「……なんですか、あれは」

そう言って、それに指を向ける。指が示すほうにいるのは

「ああ、あれですか……。ちょっとお願いしたら、ああなってしまうんです」

「お、お願い事で……？」

信じられない、という思いが声に滲んでいる。

それもそうだろう。大概のことは二つ返事で引き受けるマルテスが、部屋の隅のほうで頭を抱えているのだ。奇妙に思うのは当たり前前の反応だろう。

カービィをプニプニとしながら、ぼんやりとヨッシーはそう考えた。

「……よし。おしまい。」

……あれ？ リン兄。いつからいたの？」

テレパシーを送り終えたらしいネスがリンクに気がついた。リンクはにっこり笑って労いの言葉をかける。

「お疲れ様、ネス。……明日の夕食は何がいいですか？」

「え！？ いいの？」

驚きながらネスは尋ねる。そこに幾分かの嬉しさが滲んでいるのは明白だ。

「ええ。今日は特にいろいろと手伝ってもらいましたから。……好きなものを言ってください」

「えーっと……。じゃあ、ハンバーグ！」

「ハンバーグですね。分かりました。……となれば、すこし手伝って欲しいんですが……」

「それくらい、お安い御用だよ！」

ネスにとつては、手伝いよりもハンバーグの方が重要度が高いらしい。胸を張ってネスは言った。

「ありがとうございます」

やったと喜ぶネスの姿は、何処にでもいる普通の男の子だ。

が、ヨッシーの眼に映っているのは、リンクの表情。……いや、まなざしといったほうがいいだろうか？

何処となく寂しそうで、羨ましそうな感じがする。

これで何度この表情を見ただろう。ヨッシーは気づかれないように小さく嘆息した。

マルテスの視線が少々痛い。

ヨッシーは小さくため息をついた。うずくまってる振りをしてながら人を観察しているなんて、本当に趣味が悪いと思いつながら。

ぴよんと、ようやくカービィがヨッシーの手から逃れた。リンクの方に行くのだろう。

思ったとおり、カービィは嬉しそうにリンクに報告する。

「リンク君！ ボクも頑張ったよ！！」

そう言われて、リンクはすぐに笑顔になってカービィを褒める。

「すごいですね。ありがとうございます」

「えっへへ！ これくらい、おやすいごよーだよー！！」

無邪気にカービィは誇る。……お安い御用の意味を分かっているのは怪しいが。

「……ところでマルテスさん？」

「……何ですか、ヨッシー」

部屋の端にいる青年に声をかける。もちろん、確認のため。

「……覚悟はいいですよねぇ？」

そう言つと、マルテスは泣きそうな声で言った。

「……ほんとにしないといけませんか？」

……どつちから悩んでいたのは本当のことらしい。

が、ちょっとイラついているので、素敵な笑顔でヨッシーは言った。

「ええ」

後日。あれほど怖い笑顔はなかった……と震えながら、マルテス

はマリオに言っていたそうなの。

とりあえず、マリオさんを起こさないといけないな……。
遠くから聞こえる足音を聞きながら、ヨッシーはそう考えた。

ヨッシーって誰

かに似てるんですよ。

彼はそう言

いました。

「第三話」 下準備（後書き）

第三部分という言葉に騙された……！

前の話は第二話ですね。混乱を招いてしまったらごめんなさい。

では、前回に続いて人物紹介。

ネス

PSIの使い手。結構器用である。

少し腹黒かったりする。が、根は優しい。

カービィは放って置けない弟のような存在。

リンク

館の家事を仕切る人。料理は絶品。しかし、その所為なのか、気苦
労も多いのだそう。

少々特殊な状況下にあった為か、あまり自分の主張を表に出さない
人である。

「第四話」 目覚め

くらい闇の中に、マリオはいた。周りを見渡してみるが、誰もいない。

知っている名前を呼んでみても、返事がない。……どうやら誰もいないようだ。

どうしようかと悩んでいると、視線を感じた。さっきまではなかったはずの、だ。

嫌な予感がして、マリオは後ろを振り向いた。

そこにいたのは、黒いローブをきた人。ローブを深く被っていて、顔は見えない。背は小さいから、子供だと思う。……背の小さい大人と言う線も捨てきれないが。

その人物は、腕を持ち上げ横に振った。それは曲の始まりを告げる指揮者のようであった。

マリオはその人物の行動に身構える。……一体何が起こるのか……。

マリオはそこであることに気がつく。背後から、聞き覚えのある声が聞こえてくることに。……まるで犬のような……。
ぱっと勢いよく後ろの振り向いたマリオの目に映ったのは。

大きく開かれた口だった。

「うああああああああ……！」

マリオは冷や汗をかきながら、飛び起きた。

「ヨッシー！ ワンワンがあ、ワンワンがあ……！！！」

「……マリオさん、ここにワンワンはいませんから、安心してくだ
さい。ね？」

泣きそうな顔で、近くにいたヨッシーに訴えかけるマリオ。ヨッ
シーはマリオを安心させるためにゆっくりと言った。
と、マリオはあることに気がつく。

「あれ？ ヨッシー、何でここに……！」

「……寝ぼけてますねえ、確実に。マリオさん。ここが何処か思い
出してくださいなあ」

ヨッシーに促され、今までのことを振り返り……

「……ああ。そっか。家じゃなかったんだ」

「……そこですかあ？」

家じゃなかった以外にも、言うことはあるんじゃないのかと思うのだが。

と、マリオはそこで、周りに見知らぬ人たちがいるのに気づく。皆一様に唾然としている。

……そんなにマリオの起き方は変だったのか。

「ええつと……」

マリオが現状に気づき、何て言おうかと慌てていると、とある人物が声をかけてきた。

「よう、マリオ！ 起きたみたいだな!!」

「お前……、ドンキーか！」

彼はドンキー。マリオの知り合いのゴリラだ。手にはバナナを持

っている。

「……ドンキー、バナナは置いたらどうですう……」

「……さっきまで凄い勢いで食べてた奴の台詞か？ それは……」

呆れたように狐が言う。その言葉を聞いてヨッシーはむくれる。

「なーに言うんですかぁ。食事は大切ですよ？」

「お前の場合は食べすぎなんだ！」

なるほど、ヨッシーはここでもよく食べてるらしい。……「こいつの食べっぷりは凄いなあ……」。

「ですが、ヨッシーの言ってる事は正しいですよ。ドンキー、バナナをどうにかしたらどうですか？」

金髪の青年がそう言った。

……あ、なんかルイーダに似てる。困ってる人がいたら、真っ先に手を差し伸べそうな感じがする。

「むむ、仕方ないな……」

「じゃあ、ボクが食べるう!!!!」

そう言っつて、ピンクの物体がドンキーの持っているバナナを吸い込む。なかなか器用だ。

つーか、吸い込むつて、カービィ凄いな……。

「カービィ、オレのをとるなよ！」

「……え？ 悪かった？」

不思議そうにカービィは尋ねる。本気で言っているようだ。その瞳を見て、ドンキーはため息をつく。何も言っても通用しなさそうだからか。

「カー君、人のものつつちゃ駄目だよ。わかった？」

ボーダー柄の服を着た少年がそう言った。なんだか、弟に諭すお兄ちゃんみたいだ。

「え？ ……あ、そうだね」

「そうそう。……なら、なんて言うか分かるよね？」

少年に言われて、カービィは頷いた。

「ドンキー。……ごめんなさい」

「お、おう」

意外だ。カービィが礼節を弁えてるなんて。子供かと思っていた。……もしかすれば、ドンキーよりもしっかりしてないか？

「はは！ カービィは偉いな。ちゃんとごめんなさい出来て」

「そうかな？」

ヘルメットの男はそう言う。
いい奴そうだ。そんな感じがする。
……そろそろ尋ねていいのだろうか。

「なあ、ちょっと聞いていいか？」

「……なんですか？」

マルテスだったか？ 彼がマリオに答えた。

「自己紹介……聞いてないんだが」

皆があつと言った。どうやら忘れてたらしい。

……大丈夫か？

「……忘れるぐらいに、あなたの起き方が衝撃的だったんだよ……」

ボーダー服の少年が呆れながら言った。その言葉を聞いて、他の皆も苦笑いしている。

……確かに情けない姿だったけどなあ……。

そう思いながら、マリオは頬を人差し指でかく。

「うん。すつごく情けなかった」

「へ？」

うつうつと頷きながら少年はそう言った。マリオはそこに違和感を覚える。

……今の、あまりにもタイミングが良くなかったか？

「……僕はネス。オネットに住んでるよ。……ちなみに、話すタイミングがよかったのは、あなたの心を読んだから」

「心を……!?!」

そんなことが出来るなんて、凄いな」とマリオは素直に感動している。

「……ホントにちょっとずれた人だね……」

「……でしょう?」

ネスは呆れながら、ヨッシーは苦笑しながらそう言った。マリオはその発言にむっとなった。

「……なんだよ!」

「……彼は”PSI”という名の超能力が使えるんです」

ヨッシーは笑いながら補足する。スルーするな! とマリオは言う。

気にしないでくださいよう、とヨッシーはおどけながら言う。

「あーっと……俺も言っただいかな?」

狐が二人の間に入る。ほっとけば長くなる気がしたからか。

マリオもそれに気がついて、ヨッシーの相手をするのをやめる。
ひとつ咳払いをして、彼は言った。

「俺はフォックス・マクラウド。フォックスって呼んでくれればいい。
い。

一応『スターフォックス』っていう遊撃隊のリーダーだ」

「遊撃隊……ってことは、軍人かなんかなのか？」

「これでもマリオは意外に博識である。……ヨッシーの影響もある
が。

「いや。正しくは”やとわれ”遊撃隊。……まあ、傭兵みたいなも
のだな」

「へえ。……凄いんだなあ」

よろしくと言って二人は握手をする。

と、今度はヘルメットの男が言う。

「俺はキャプテン・ファルコン！ F-ZEROという種目のレー
サーをやっている。よろしくな！！」

「エフゼロ……？ ……なんだか面白そうだな！」

「おう、面白いぞ！ ……一回見に来たらどうだ？」

「ああ！ チャンスがあったら行く！」

嬉しそうにマリオは言った。実は、レースだなんでも大好きなのだ。

「つーことで、チケットよろしく」

「ああ。特等席を用意してやるよ！」

がっしりと手を組みながらそう言った。実はちゃっかりしてるマリオである。

「私はリンクです。よろしくお願いしますね」

金髪の青年がにっこりと笑いながら手を差し出した。

「俺はマリオ・グランカート。マリオって呼んでくれ。 ……って、もう知ってるだろうけど」

マリオもよろしくと言って握手をする。

「リンクさんは、私たちの分の食事を毎日作ってくれるんです。ちなみに、ちょーちょー絶品ですよ」

またヨツシーの補足。珍しく、凄く主観的だ。

「それで、あそこにいるのが」

ヨツシーは壁にもたれているロボットみたいなものを指差す。

「サムス」

ぼそつとそれは言った。くぐもっていて聞き取りにくかったが…
…、名前なのか？

「今のは名前です。で、そこにいるのが……」

そう言いながら、すいっと扉辺りにいる黄色い人形みたいなものを指差した。青いヘアバンドをしている。

「……ピカチュウだよ」

ぶっきらぼうにそう言って、彼は部屋を出ようとする。
それに気がついて、ネスがあわてて呼び止める。

「ちょ、ピカチュウ！」

「……んだよ」

「もうちょっと言うことが……」

ネスの言葉はあるでしょ、と続くはずだった。
彼の横を掠った電気がなければ。

「っー！」

「うるせーよ……」。

てめーらみたいに、仲良しごっこに付き合っつもりは、無いっー！」

そう叫んで、彼は部屋から出て行く。

少しの間部屋は静まりかえっていたが、何処からとも無くため息
が聞こえてきた。

「な、なんだあいつ……」

そんな言葉が、マリオの口から漏れた。
その言葉を聞いて、ヨッシーは苦笑いする。

「……ああいう子なんです。悪い子じゃ、ないんですがねえ……」

「悪い子じゃ、ない……？ ヨッシー、「b」よくもまあそんな言葉が出るね……」「/b」

ぎろりと睨みながらネスはそう言った。ヨッシーはただ笑うだけだ。

「ネス。まあ、落ち着いてください……」

リンクはそう言ってネスを宥める。はあ、とネスはため息をつく。

「……部屋に帰るよ……。カー君、行く」

そう言って、ネスは食堂を出て行く。

「マリオ、ばいばい」

手を振りながら、カービィはネスの後を追って食堂を去った。

「……彼はいつもあなののか？」

マリオはそう尋ねる。もちろん、ネスのことだ。
ヨッシーは首を横に振る。

「いいえ。ピカチュウが絡んだときだけ、あんな感じになるんです」
「う」

あの二人が仲良くなったら……とヨッシーはため息をつく。
……なぜか、馬が合わないらしいんですとはリンクの言葉。

「つーか、いつの間にかサムスもいなくなってるし……」

「ああ、それはいつものことだ」

フォックスは顔色一つ変えずに言った。本当にいつものことなのか……。

「そういえばあ……。マリオさん、行く当てがないんですよねえ？」

くるりとマリオのほうを向いて、ヨッシーは確認した。
その言葉にマリオは頷く。

「ああ。家に帰れたらいいんだが……」

「無理です」

……。即答された。しかも語尾が……。

「どこかの誰かさんのせいで、皆さん帰れなくて困ってるんですよ。……。そう、「b」どこかの誰かさんのせいで、ね」

にっこりと笑いながらヨッシーはそう言った。笑っているはずなのに、なんだか怒っているように見える。
びくりとマルテスの肩が揺れる。

……。本気では言っていないと思うんだが……。

「……それで、皆さん、帰るまでの間にここで暮らしてるんですがあ……。」

「ここには二つの目的があるんですよねえ？ マルテスさん」

「え？ ……っと、はい。そうです」

「こくりとマルテスは頷く。

「……なんだか、怪しくなってきたぞ……。
指を一つ立てながらマルテスは言う。

「……まずひとつ。ここにいる間、皆さんのレベルアップのお手伝いをします」

「具体的に言うと？」

「戦闘に役に立つ技術を教えます。また、その技術をものにするための鍛錬場のような所を用意しています」

「こくりとマルテスは笑う。その言葉には嘘がないみたいだ。

「そして、ふたつめは。ふたつ、めは……」

「……ふたつめは？」

いきなり彼の歯切れが悪くなる。

おずおずとマルテスはヨッシーに尋ねる。
なるほどな……。

「……あの手が……」

ぼそり、とマリオは小さな声で呟いた。
いつぞやに実行した作戦とまったく同じ

「……どうですか、ここに残ると言うのは」

うそ臭い笑みを浮かべて、ヨッシーは尋ねてきた。
だからマリオは。

「　　マルテス、お前、騙されてるぞ」

「……は？」

間の抜けた声が、マルテスの口から漏れた。マリオが何を言い出したのか、わかっていないようだ。

……まあ、これが当たり前の反応か。

「あいつはなあ、美味しいことで釣っというて、人に恥ずかしいこと

間抜けな声が、マルテスの口から漏れる。あまりにも予想外の言葉だったからだ。

「ほっといたら、また変なことしだからな、こいつ。……もうそんなことをさせない為にも、残るってことだよ」

それが理由、とマリオは言った。
マルテスは何かに気がついて。

「そ、そうですか！ なら、善は急げ。あなたの部屋に案内しますね、ね！」

早口にそう言いながら、マルテスはマリオの背を押して食堂を出て行くようにする。

「ちよ、まだ晩飯……」

食っていないんですけどー！
悲しいが、マリオの言葉は無視された。

その様子をニコニコと笑顔で見ながら、ヨッシーはマリオに手を振る。

そっつー言葉。

「……まごごめりー」

井原の茶番

だね、とワラフ。

「第四話」 目覚め（後書き）

前に”第二話”を”第三話”と書き間違えていましたが、今回もや
つてしまった……OTL
本当にごめんなさい！

というわけで、人物紹介。

ドンキーコング

ジャングルに住むゴリラ。マリオの知り合いで、たまに一緒にテニスやレースなどをする仲。

遊びとしての勝負は好きなのだが、あまり好戦的とはいえない性格。気は優しいためだろう。

しかし、守るもののためならば、迷うことなくそのパワーを振るう。少々(?)マッド気のあるヨッシーとは、何故だか仲がいい。

フォックス・マクラウド

狐。雇われ遊撃隊”スターフォックス”のリーダー。真面目で頼りがいのある人物。

まだ若い所為か、未熟なところも多々ある。字のことは……言わないであげてください。

キャプテン・ファルコン

本名は『キャプテン・ダグラス・ジェイ・ファルコン』らしいのだが、そんな事を知っている人はほとんど居ない。

『伝説のF-ZEROパイロット』などと言われているが、実際は

面倒見のいいおっちゃん。

陽気な性格ではあるが、いろいろと考えて行動している。

コーヒーや紅茶を淹れるのが凄くうまい。賞金稼ぎ（バウンティハンター）でもあるらしい。

サムス・アラン

宇宙を股にかける賞金稼ぎ（バウンティハンター）。

基本的にはパワードスーツをしているため、ロボットにも間違えられることがたまにあるが、れっきとした女性。しかし、その身体能力は常人離れしている。

人付き合いは本当に下手。一人で居た時間が長すぎたのだろう。

ピカチュウ

本名『ヒカル』。漢字で書くと『光』。まさにそのまま。

つつけんどんに物事を言ったりするが、実は優秀。不良のふりをしているが、知り合い、特に家族に手を出すものには容赦が無い。

戦闘に関しては天才といっても過言ではない。

「第五話」 月が食われる日

部屋に帰ってきた彼は、なんとなく窓のほうへ近づいた。

そして窓を押し開ける。心地のよい風が肌をなでていく。空を見上げると、満天の星が輝いていた。

じつと夜空を見ていると、あることに気がついた。

真ん丸のほの月が、少しずつ欠けていつているように見えたのだ。

今宵は、月が喰われる日。

* * *

「……………マリオさん」

マルテスはいきなり、マリオに声をかけた。

どうした？ とマリオは尋ねる。しかしながら、マルテスは何かを話そうとするくせに、結局口を噤んでしまう。

これで何回目だろうか。並んで歩いているが、さっきから彼の様子がおかしい。

……………すごく居心地が悪い。

出来ることならば、何かの理由をつけて逃げ出したいが、マリオはマルテスに案内されている身。なかなかそうもいかない。

「……………着きました」

そう言っつて、マルテスはある部屋の前で立ち止まった。マリオも彼の隣で立ち止まる。

なんて事のない、普通の扉だった。木で出来ている扉で、金色のプレートと同色のドアノブだけが特徴的だ。

金のプレートには4桁の文字が書かれている。

「2101号室……………。とりあえず、ここがあなたの部屋です」

プレートに書かれている番号を言いながら、マルテスはマリオの方を見る。

真っ白い服のポケットの中から、彼は金色の鍵、のようなものを取り出した。それにも金のプレートがついている。

……………思うに、『2101』とでも書かれているのだろう。

マリオはそれを受け取って、鍵穴に差し込む。くるりと鍵を回すと、小さな音がした。

「どうぞ、入ってください」

マルテスにそう言われて、マリオはドアノブを回した。

「……あれ？」

マリオはドアノブを回しているが、押しても引いてもドアが開か

ない。

もしかして……と思いながら、マリオはもう一度鍵を回した。そして、もう一度ドアノブを回して押してみると

「……えっと、……あーっと、その……。」

……、「ごめんなさい……。」

マルテスはしゅんとなりながら謝った。

今度はしっかりと、扉が開いた。

「そんなに気にするようないじゃないよ」

苦笑いしながらマリオは言った。慰めでもなんでもなく、心からそう思っていた。

「これで橋を壊してください」とでも言うように、己の背後に斧を置くような亀を知っているマリオからしたら、これぐらい可愛いものだ。

……そっぴやあいつ、自分の城を乗っ取られたこともあったな……。

とりあえず、二人で部屋に入ることになった。

電気も何もついていないせいで、部屋の中は真っ黒だ。

スイッチは何処だろう……と思っていると、パチという小さな音と共に、いきなり電気が点いた。

「電気のスイッチなら、ここですよ」

そう言いながら、マルテスは白いスイッチの所にいた。どうやら、彼が点けてくれたらしい。

「ありがとう」

「どういたしまして。……そんなに大したことではないんですがね」

少し照れ笑いながら、マルテスはそう言った。……うん、さっきより雰囲気良くなってる。

「いや、手探りで探したらつまずいてたかも知れないし……」

「……大丈夫ですよ」

「……へ？」

マリオには、マルテスの言葉の意味が分からなかった。が、部屋

の中を見て納得した。

「……何にもないなあ」

「広くもないが狭くもない部屋に置かれていたのは、ベットとクロ
ーゼットだけ。」

「……すみません……」

マリオの小さな呟きに、マルテスはまたもや謝る。

「……そして、その言葉に、マリオの動きが止まった。」

二人の間に、嫌な沈黙が流れた。

「……あのさあ、マルテス」

唐突に。

長く感じられた沈黙の後、唐突にマリオは口を開いた。

「……………何でしょう」

マルテスは、あまりいつもと変わらない声で返事をした。

正しくは、違う。……………いや、本人は気がついていないだけだろうか？

マリオからしてみれば

「……………何をそんなに怯えてるのは分かんないが、そんなにびくびくするもんじゃないぞ？」

「……………」

マルテスは黙って俯く。何も言い返す気はないようだ。

……………困ったなあ……………。

「……………あーっと、さっきの言葉は文句でもなんでもないから……………俺、よく『思ったことを口に出しすぎ』って言われるんだ。

だから、気にしないでくれ。な？」

本音を言えば、こんなに何度も謝られるのは、正直イヤなのだ。それに、彼の怯えは、なんだが変だ。

……そんな怯えられたら、ちよつと傷つく。

その言葉を聞いて、マルテスは息を一つはいた。

このため息、呆れているものではなく、安堵したから出てきたものなんだろうな……。なんとなく、マリオはそう思った。

「……分かりました。」

……とは言っても、このままじゃ流石に寂しいので、「ご希望のものを用意しましょう。」

「ご希望のものを用意って……。」

「いっていいって！　そこまでしてくれなくても……。」

マリオはあわててそう言うが、マルテスは頑として譲らない。

「いえいえ。マリオさんがちゃんと帰れるまで、ここがあなたの家なんですから。家具がないと寂しいでしょう？」

他の皆さんは部屋に何か置いてますよ？」

「いや、だからって……。」

「大丈夫です。すぐに用意できますから。……大体二、三日ぐらい……ですかね」

「え？ 二、三日で？ ……じゃなくって！」

マルテスの目が一瞬光った！ ……気がした。

「……マリオさん。あなたは人の好意を無駄にする気なのですか？」

「い、いや、そんなわけじゃあ……」

ま、まずい。このパターンは……！

「だったら！ 黙って受け取ってくださいな。これはある一種のお詫び」なのですから」

ここまで言われてしまったら、マリオに残されている選択肢は一つだけ。

「あ、ああ。分かったよ……」

頷くしか、なかった。

* * *

「つ、疲れた……」

ようやく、マリオは食堂に帰ってきた。すごくゲッソリとしているのは、気のせいではないだろう。

あの後。

先ほどまでの大人しさは何処へ行ってしまったのか、マルテスの恐ろしいぐらいのマシンガントークが炸裂。

ようやく、何とか理由をつけて逃げてきたのである。

だが、これでひとつ分かった。

どうやら、マルテスは調子のいいときと悪いときの差が激しすぎる……！！

「お疲れ様ですう」

そう言って、ヨッシーがマリオの前に水の入ったコップを差し出した。

食堂を見渡すと、残っている人影は少ない。ヨッシー以外には、ファルコンとフォックスしかいない。向かい合って何かしているようだ。

ヨッシーからコップを受け取りながら、マリオはすばやく確認した。

「……ずっと待っていてくれたのか？」

「だってマリオさん、夕食、食べそびれているでしょう？ お握り、ありませんかあ？」

ヨッシーの言葉はマリオの質問とかみ合っていないが……。

……まあ、いいか。夕食の方が大事だし。

コップの水を飲みながら、マリオは思考を放棄した。いろいろと疲れていたのだし、仕方のないことだろう。

「……もらじ」

「どいぞ」

交わされたのはたったの二言。彼らの間ではよくあることだ。

とりあえず、お握りを三つ手渡された。代わりにコップをヨツシ
ーに回収される。洗いにも行ってくれるのだろう。
立って食べるわけにも行かないので、ファルコンとフォックスの
方に行く。さつきから気になっていたのだ。

「何してんだ？」

そう言いながら、二人の近くのいすに腰掛ける。

「オセロ」

ほぼ同時に、二人は答えた。ファルコンはマリオの方を見たが、
フォックスは盤上から目を離さない。

見たところ、白よりも黒のほうが多い。

「……ここでどうだ」

そう言って、フォックスは白を置く。パチツと言う軽快な音がし
た。くるりと周りの黒を反転させると、白が少し多くなった。まだ
まだ黒には足りないが。

今度はファルコンが盤上を覗む。

その様を見ながら、マリオはお握りをほおばる。塩加減がちょう
どいい。

ファルコンは悩みに悩んで、黒を一つ置く。

残念ながら白を多く返せなかったが……。これだけの差があるのだ。十中八九、フォックスは負けるのではないのだろうか。マリオから見たら、そう思えた。

ただ、フォックスの眼からは未だ負ける気がない事がわかる。ファルコンもそれに気がついているのか、圧倒的な差でありながらも、一手一手を悩んでいるのだろう。

……俺がこの二人とオセロとかで勝負したら、正直勝てる気がしないなあ……。

もぐもぐと二つ目のお握りを頬張りながら、マリオはそう思った。

三つ目のお握りを口にする前に、二人の勝負は終わった。

「……終わったー」

そう言ってフォックスは伸びをする。長い間、オセロ盤に向かっていたのだろうかから仕方ないことだろう。

ファルコンは肩を何度かぐるぐる回す。そして一言。

「それじゃあ、数を数えようか」

「ああ。分かった」

フォックスは白を、ファルコンは黒を回収し、それらをどんどん端から並べていく。

すべてが並び終えたら、勝敗が分かる。マリオは三つ目のお握りを頬張りながら盤上を眺める。

見たところ、ほぼ同数。が、真ん中の列を並べているとき、ファルコンの手が止まった。

どうした、と尋ねるまでもなかった。彼の手元に白と黒の石はない。フォックスの手は真ん中の列を通り越して、黒の並んでいる列に、一つだけ白を置いた。

つまり

「……………三十三対三十一……………。どうやら、フォックスさんの勝ちみたいですねえ」

いつ来たのか、ヨッシーがマリオの後ろから盤上を見てそう言った。……………気配なしに、だ。

「おわつと……………！ おま、人を脅かすのはやめろって言ってるだろ！？」

「勝手に驚いておきながら、そんなことを抜かすんですかあ？」

本気で驚いたマリオの抗議は、ヨッシーの冷ややかな一言で一蹴された。

……なんだか最近、ヨッシーが冷たい気がする……。

一人で勝手にショックを受けているマリオは華麗にスルーし、ヨッシーは二人にコップを差し出す。

ありがとうと二人は言って、コップを受け取る。中身はキンキンに冷えた麦茶だ。

ファルコンはそれを豪快に煽ってから、フォックスに言った。

「……やっぱり、フォックスは強いなあ！ まさか負けちまうとはな……」

「正直、俺が負けるかと思ってたけど……。たった二個違いだし、まぐれだよ」

そう言っつて、二人は笑いあう。嫌味などはまったく込められていない。

知ってますかあ？ とヨッシーの解説。

「オセロというゲームは少し特殊で、石の数が少ないほうが優勢で

ある場合が多いんですよ。

ですから、多いからって油断していると、結構すぐに負けてしま
うんですっ」

「「「へえ」」」

相変わらず、無駄に博識だ。

やっぱり、知らなかったんですねとヨッシーは苦笑する。

「……特に何も考えずにこれで遊んでたけど、結構奥が深いんだな
あ……」

なんととはなしに、フォックスは呟いた。確かに、とファルコンは
頷いた。

そういえば、とフォックス。

「マリオ、あんたもマルテスに何が欲しいか聞かれたんじゃないか
？」

「あ……。もしかして、フォックスも？」

フォックスの言葉から、マリオはそう尋ねてみた。
ああ、とフォックスは頷く。

「というか。ここにいる皆が同じ目にあってるんだ……」

そう言ってため息一つ。

……ということは、なんだ。皆一度はあのテンションを体験したことがあるのか。

「そついや、修行の話は聞いたか？」

次はファルコンが尋ねてきた。

「……修行？ 何それ」

マリオが逆にそう尋ねると、ヨッシーからの説明が入った。

「マルテスさんが家具などを用意している間、修行……というか、皆で遊ぶときの基本の技を練習させられるんです」

皆で遊ぶ、と言うのは初耳だ。皆で遊ぶと言うのは？ と尋ねる

と。

「拳で語り合ってます」

……………。

フォックスが正しいことを教えてくれた。

”大乱闘”と呼ばれているもので、決められたルールの中で闘う
と言っただ。なるほど、楽しそうだ。

で、そのときに必要な技術を覚えるのが、修行。

「基本的に何やるんだ？」

マリオがそう尋ねてみるが、皆は同じ反応を示した。

やれば分かる。

……………やれば分かると言われたら、余計に気になるんだが。

と、語り合っている四人のところに金髪の青年がやって来た。

「……………あれ？ 皆さん。何やってるんですか？」

不思議そうにリンクは言う。

夜もふけ始めた時間に四人もの人が集まっているのだから、少し異様に見えるのは仕方ないだろう。

ちよつと世間話を、とマリオがふざけて言う。大体あっているから、誰も突っ込まなかった。

その言葉を受けて、リンクは少し怪訝そうな顔をした。文字通りの意味に受け取ったのか。

そういえば、とリンク。

「洗い物をしているときに、月を見てたんですが……。満月だったはずなのに、どんと欠けていつてるんですけど……」

大丈夫なんでしょうか。心配そうな顔でリンクはそう言った。

それを聞いて、ヨッシーは一瞬考え、四人に提案した。

「……ちよつと、外に行きませんか？ 暖かい毛布でも用意して」

曰く、温かい飲み物でも飲みながら、月が欠けていく様子を見な
いか、と。

リンクが見た現象 言うまでもなく”月食”のことだが、一

年に大体二回ほどしか見れないと言う。

本来なら完全に隠れるまで、おおよそ二時間ほどかかるらしい。だが、今からなら後一時間程度でその様を見れるらしく、ゆっくりと星を見ながら月が欠けていく様子を見ないかと。

ちなみに、月がもう一度現れるには、四時間もかかると言う。隠れた分出てくるのだから、二倍ほどの時間がかかるのは仕方ないだろう。

ヨッシーの説明を聞いて、皆考え込む。

一番始めに結論を決めたのは、リンクだった。

「……面白そうですね。その”月食”と言うのに興味がありますし……。ヨッシーさん、いろいろと教えてください」

それに対する返事は、ヨッシーの嬉しそうな笑顔だった。人に物を教えたりするのが好きなのだ、こいつは。

一年に二度だけと言うのなら……とフォックス。

月食を見るのは久しぶりだな」とファルコン。

……どうやら、皆一様に乗り気なようだ。

まあいいかとマリオは考える。

本音としては、久しぶりにベットでゆっくり寝たかったが、たまにはこういうのも悪くないだろう。

「……それじゃあ、用意してから、行きましようかあ」

四人は応と返事をした。

* * *

相変わらず、窓辺で外を見てみると、とある五人が外に出て行くのが見えた。

手には布のようなものを各自持つている。……何をする気なんだろう。

少し気になって、そいつらを見てみる。彼らの影はある程度歩いたところで止まり、小さくなった。……多分しゃがんだりしたのだろう。

誰か一人が、近くに何かを置いた。いきなりそれが燃え出した。

火の光によって、五人の状態が見えた。

すこし遠いので分かりにくい……、身体に毛布のようなものを巻きつけている。火の元で緑のもの　ヨッシーだったか？　そいつが何かをしている。

ヨッシーは組み立てた何かを火にかぶせるように置き、その上に何かを置いた。

なんだろうあれは……。ああ、ポットだ。

なんだあいつら……？　夜空でも観察するつもりか？

それだけではないだろう。即座に自分の考えを否定する。となれ

ば……。

「月が食われる様子でも見るつもりか？ …… たたく、酔狂な……」

……その酔狂な輩に、自分も含まれていることに、ふと気がついた。

多分、気のせいだろう。そう言うことにしよう。

もう、下の五人には興味がなかった。

それにしても。

こんな月を前にも見た気がする。 …… 半年ほど前のことだろうか？
あの時は……、そうだ、”冒険”しすぎてずいぶんと遠くまで歩いてしまった弟たちを探しに行った日のことだったか。

はあ、と一つため息が口から漏れた。

俺がいなくなつて森の皆は大丈夫だろうか。 …… いや、サイドンのおばちゃんがつまくやつててくれるだろう。

でもなあ……。 ニドリーノ ドミノと ニドリーナ リーナは無駄に喧嘩するしなあ……。

ヤドゥン ヤドゥーはほつといたらぼけ〜としたままだしなあ……。 ぽっぽのやつがあいつを突いたりしたらなあ……。

オニスメ オスメはすぐにどこかに行こうとするし……。 ヒチュー ライトもそれについていってなきやいいが……。

それにだ。プリンの奴がめっちゃ心配しているだろうなあ……。

故郷のことを思い出して、いろいろと心配になってきた。

プリンとは俺の幼馴染と言ってもいい奴だ。気がついたら近くにいた。

できれば、あいつに無駄な心配はさせたくない。ほっといたらなんでも自分のせいにするしな……。

だけど。……いや普通にありえないことだろうけど……。

あいつだったら、ここに乗り込んでくるかも。

……。

「……今、恐ろしいことが浮かんだ気がする。……うん、気のせいだ。そうだ、気のせいだ……」

実際にそんなことが起きてみる！ 俺の今の状態をあいつに知られたら、絶対にいろいろと面倒なことを言われそうだ。

昔のことを引っ張り出されるかもしれない。……それは勘弁願いたい。

ふと、紫髪の話思い出した。

あいつの話をすべて鵜呑みにするわけではないが、あいつははっきりと言った。

「ここは俺の住む世界とは違う」と。

……頭おかしいんじゃないかと、始めは思った。

だが、ここにいる奴らの反応を見て、納得するしかなかった。俺の世界ではありえないことだ。『ポケモン』を知らないなど。

『ポケットモンスター』。それを略して、『ポケモン』。

誰がそう呼び始めたのかは知らない。だが、気がついたら俺らはそう呼ばれていた。

俺の世界では当たり前前の知識。ガキでさえ知っている。

それをこいつらは、誰一人とて知らなかったのだ。

あの紫が言った言葉は、残念ながら真実だった。

プリンが来ることがないことは分かっている。そして、俺が容易に帰れないことも。

とりあえず、紫髪が言ったことが真実だと分かった日、あいつを半殺しにしておいた。あいつが原因の一端を担っていると分かったからだ。

出来れば、もうちょっと痛めつけてやりたかったが……。忌々しいことに、あいつが俺を元の世界に帰す方法を知っているらしいのだ。

またため息が口から漏れた。……そういえば、ため息つくとき幸せが逃げるって姉貴が言った気がするな……。

空を見上げると、月が半分以上消えていた。

……とりあえず、俺はただ帰りたいたいのだ。だから、あの赤帽子のガキにかまう必要もないし、そのほかの奴らと仲良くなる必要もな

い。

だが何故だ？ 紫髪が俺に言った言葉が、頭から離れないのは。

この世界に飛ばされた日。あいつは笑顔で俺に言った。

『強くなりたいと思うのなら、他を知り、己を知ることだ。ヒカル』

まったくもってお断りだ。

少しの間、

世界は闇に包まれた。

「第五話」 月が食われる日（後書き）

気が付けば、アクセス数が500以上に……。
皆さん、有難うございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9837g/>

プレイヤーズ

2010年10月10日18時33分発行